

沖合エビ資源調査

(第2県土水産資源調査)

石田健次・由木雄一

1. 研究目的

隠岐島周辺を中心とした本県沖合域における、エビ類(モロトゲアカエビ、イバラモエビ、ホッコクアカエビ、クロザコエビ類)を始めとする底生性魚介類の分布状況を明らかにし、当海域におけるエビ籠漁業の可能性について検討する。

2. 研究方法

平成13年4~5月に、試験船「島根丸」で本県沖合の大陸棚斜面を中心に、籠による試験操業を実施した。この結果と、平成11年以降に同海域で資源調査を目的に行われた行われたトロールおよび籠の試験操業の結果をあわせて解析した。

3. 研究結果

本県沖合の水深170m~500mの海域においてエビ、パイ籠で23回、カニ籠で9回、トロールで39回、計71回の調査で得られた資料を解析し、次のことが明らかになった。

漁業として有用な、魚類を除く底生性魚介類の分布状況がほぼ明らかになった。

最も卓越しているのがズワイガニであるが、本種は今回の目的であるエビ籠漁業の対象種には成り得ない。

エビ類ではクロザコエビ類が最も多いが、本種は籠の漁獲率が低い。また、今回の調査水深より深い海域に分布の中心があるホッコクアカエビも、今回の調査では籠の漁獲効率は低いという結果となった。したがって、この2種のエビ類は籠の漁獲対象種としては考えられない。

籠の漁獲対象となりそうな種はモロトゲアカエビとイバラモエビである。これらは籠の漁獲効率が高く、価格も高い。分布も似かよっており、水深200~250m前後にその中心がある。しかし、今回の対象海域である隠岐海域の分布量は非常に少ない。

パイ類はエビ籠の混獲種として4種が考えられるが、最も分布量が多かったのが、隠岐、石見海域ともに既に漁業資源として利用されているエッチュウパイであった。本種は、籠の調査では石見海域が多く、トロールの調査では逆に隠岐海域の方が多いという結果であった。次に量の多いエゾボラモドキ類、シライトマキバイ、ツバイはエッチュウパイに比べると、分布量はそれほど多くない。

隠岐周辺海域の特徴をまとめると、比較的平坦な大陸棚斜面が広がり、ズワイガニとエッチュウパイの分布が卓越している。特に、エッチュウパイは石見海域のものより大型の個体が多く、平均殻高で15mm以上も大きかった。しかし、エビ類(モロトゲアカエビ、イバラモエビ)の分布量は非常に少ない。

エビ籠の主対象であるモロトゲアカエビとイバラモエビについて、平均漁獲量および平均単価から海域ごとに1航海当たり(使用籠数を1,500籠とした場合)の漁獲金額を試算すると、隠岐海域では約2万円、石見海域では約25万円となる。時期的なものや調査定点の取り方などでこの値は変る可能性がある。しかし、いずれにしても隠岐海域ではこれらのエビ類の分布密度はあまりにも低く、エビ籠漁業では採算がとれないと判断される。

4. 研究成果

調査で得られた結果は「島根県沖の深海性エビ類資源調査報告書」で報告され、これを基にエビ籠漁業としての新規漁業の可否の検討資料に利用された。